

9. 戦 跡

室蘭は古くから北海道を代表する工業都市のため、太平洋戦争中に空襲と道内唯一の艦砲射撃により甚大な被害を受けました。市内には防空壕跡地や加農砲掩体跡等が残り、艦砲射撃等に関する当時の様子も多く語り継がれています。戦争の記憶が遠いものになってきていますが、室蘭の戦争に関する市民の証言や遺物などは、平和の大切さを今日に伝えています。

(空襲と艦砲射撃...15ページ参照)

じゅうごせんちかのんほうえんたい

十五糎加農砲掩体跡（小橋内町）

昭和20年(1945)、噴火湾から侵入する敵の艦隊とその攻撃を想定し、それを迎撃するため、十五糎加農砲（砲身の口径が15cmの大砲）を収める掩体（コンクリート製の蔽い）2基（予定3基）が造られました。2基の掩体は山の斜面に対し、横向き上下に配置され、噴火湾（現在の森町）方面に向いています。現存するのは斜面下段の掩体です。

掩体は北部軍管区司令部稲木隊（工兵約300人）が、約4カ月かけて構築し、上に土をかぶせて完成させています。しかし、この掩体に砲を2門据え付けたかは不明です。

戦後、この掩体跡はかぶせた土を取り除き、内部を住居として改装し、住宅として昭和50年代まで使用されていました。

測量山の観測所跡（清水町）

内陸部に据付けられた十五糎加農砲からは噴火湾や敵艦船を直接視認できないため、敵艦の位置などを知らせる目的で、噴火湾（現在の森町）を向いた測量山山頂付近に、上下2段の監視窓をもつ十五糎加農砲の観測所が構築されました（未完成という情報もあります）。

旧市立病院から旧料亭常盤への地下道跡と地下診療室跡（常盤町、幕西町）

昭和18年(1943)頃、旧市立病院では入院患者の収容と医療業務の確保を目的に、市立病院の分院として買収されていた料亭常盤と裏山のトンネルで結ぶ計画がたてられ、海軍陸戦隊指揮のもと、地域住民の勤労奉仕により約50mのトンネルが同19年(1944)に完成しました。

このトンネルは、爆風による被害対策を考え、「くの字型」に掘られており、その通路には手術室や治療室など設けられていました。空襲の際には港内の艦船が攻撃され、多くの負傷兵がこの地下治療室等に運ばれ、治療が行われました。

昭和30年代までに両入口は閉鎖され、平成9年(1997)には市立病院が移転、平成11年(1999)には料亭常盤も解体されました。現在、入口のあった両斜面は防災工事が行われ、地下道の痕跡は残っていません。

華工収容所跡地（海岸町ほか）

太平洋戦争末期、国内の労働力不足を補うため、中国や朝鮮半島から多数の人たちが連行されました。昭和19年(1944)、室蘭には約1,800人の中国人が連行されました。日本港運業会室蘭第一華工管理事務所（旧 港の文学館敷地）など5カ所の収容所に配置され、石炭や鉄鉱石、木材や木炭などの運搬労働を強いられました。室蘭の収容所では終戦までに約560人が亡くなりました。

防空壕跡（海岸町ほか）

市内には、昭和20年(1945)3月までに、16カ所（成徳国民学校前や輪西町日鉄診療所など）の公共防空壕（総延長748m）が造られました。その他にも町会や学校、民間などで造られた防空壕は、約450カ所に及びます。

海岸町1丁目にあった旧国鉄札幌鉄道管理部の壕跡（防災工事により消滅）は、4カ所の入り口と大きなホールがあり、他にも部屋がある大規模なものでした。

室蘭飛行場跡地と防衛司令部跡地（八丁平）

昭和10年(1935)、札幌 東京間定期航空路の要衝に位置するため、現在の八丁平に、長さ300m、幅11.5mの滑走路をもつ市営飛行場が造られました。同18年(1943)、陸軍は市民の勤労奉仕による拡張工事を始め、長さ550m、幅20mの滑走路に拡張されました。この飛行場には飛行第63戦隊の一部が駐屯後、第20飛行団飛行第54戦隊の分遣隊が駐屯していましたが、終戦時に飛べる戦闘機はほとんど無かったようです。また、飛行場近くには室蘭の各部隊をまとめる防衛司令部が地下に造られましたが、戦後、土地区画整理により軍事設備は解体されました。（幻の飛行場「八丁平」...15ページ参照）

栗山高射砲陣地跡地に残る掩体跡（八丁平）

市内に6カ所（高平、栗山、輪西、トッカリシヨ、チャラツナイ、絵鞆）にあった高射砲陣地のひとつで、栗山高射砲陣地跡に残る掩体です。

昭和18年(1943)、栗山（現在の八丁平の一部）に新設された高射砲陣地には、秋田県から独立高射砲第32中隊が移駐して、八八式七糎高射砲6門を備えた第7中隊として配備されました。その後再編し、同20年(1945)7月14日の空襲を迎えました。

この掩体は台座の固定部分等から、七糎高射砲用ではなく、高射算定具や測高機、高速測定機用の掩体と思われます。

がしどあんのん 我此土安穩の碑（大沢町）

昭和24年(1949)、輪西元町広場（現在の輪西公園）で横綱照国や横綱羽黒山による土俵入りが行われ、市内各寺院の僧侶や遺族も参列して戦災死没者五周忌追善供養が行われました。その際、立雲寺の林舜祥住職が供養の為に建立した碑と思われます。「我此土安穩」は法華經の一節で、題字揮毫と手形は、照国（横綱、秋田県出身、横綱在位：昭和18～28年）によるものです。

また、他にも昭和21年(1946)に、大関佐賀の花、大関琴錦など東京相撲一行（約80人）が来蘭し、市役所横の特設土俵で戦災戦没者追善供養の相撲が行われました。

このほかの慰霊碑は、碑および史跡...37ページ参照。